

茨城NPO情報

MONTHLY COMMONS

茨城のNPO活動を応援する月刊情報紙

1...巻頭コラム・NPOのひとびと・トピックス
2...NPO一日体験・情報掲示板・五軒町だより

編集/発行

特定非営利活動法人 茨城NPOセンター・commons
〒310-0063 茨城県水戸市五軒町2丁目2番23号102

☎029-300-4321 FAX 029-300-4320

URL <http://www.npocommons.org>

E-mail info@npocommons.org

第13号

2003.11

分野違えど苦勞は同じ

空
飛ぶ
帚

先日、ネパールで農村開発に取り組んでいるNGOの方の話の聴く会を開いた。シャプラニール=市民による海外支援の会というNGOだが、シャプラニールが、ベンガル語で睡蓮の家という意味だと初めて知った。もともとバングラディッシュが1971年に独立した後、農業振興の支援に入ったことがきっかけで活動が始まり、96年からネパールでも活動を始めた。▶体験談を話してくれた岡山典靖さんは、99年から3年間カトマンズで現地スタッフのリーダーを務めた人物で、今、全国各地を回って活動紹介を行っている。ネパールの状況があまり知られていないため、風土、民族、言語、宗教など様々な質問が寄せられ、どの話も興味深かった。▶岡山さんたちは現地のNGOと協力し、いくつかの地域で、農業、識字、貯蓄、衛生などに関する指導を行ってきた。標高が高い地域で道路がないため、現地に着くまで2日も歩いて行くという。家庭には電気もなく、女の子は小学校低学年までしか通えないとのこと。そうした地域で、貯蓄融資や野菜生産を住民がグループをつくって進めるよう支援している。▶それまでその地域になかったものを作るとき、住民や現地のNGOとも様々な葛藤があったという。自立支援のために、どんな方法がよいのか悩みながらの活動だったという。正直に話してくれた岡山さん。活動場所は違っても同じだなと感じた。

(文 横田能洋)

茨城県認証NPO法人
計174法人(11月1日現在)

勤労者マルチライフ支援事業
勤労者ぼらんていあ・ねっと
<http://www.volunteer-net.jp>

余暇や退職後の時間を活用して、ボランティア活動を始めませんか。 commonsは、あなたの社会貢献活動を応援しています!

「セカンドライフ」の充実を!

明るく支え合う、それだけで



NPO活動の多くは、個人的な事柄から出発する。それがだれにでも起こりうる普遍的な事柄であれば、人々の共感を得て、やがて大きな渦になる。「下館地域在宅介護を支える会」(下館市)は、会長の小松崎登美子さん(56)と夫の光正さん(57)が、40歳代で直面した闘病と介護が発端だった。

働きざかりを襲った病

NPOのひとびと
二人は生家が隣土の、幼なじみ。縁は「互いに、親の背中におぶさりながら、親同士の井戸端会議を、子守唄のようにまどろみながら聞いていた」(登美子さん)頃までさかのぼる。

光正さんが病に倒れたのは、13年前の44歳の時。それ以前に、予兆のように、人生の大きな変化が光正さんに訪れている。民営化直前の旧国鉄を40歳で退職したことだ。労働組合の幹部だったため、組合員の職の安定を優先させるため、労使交渉に心血を注ぐ。事実上の退職までさらに2年掛かった。

市民活動 龍ヶ崎市で開講中 パワーアップ講座

市民活動センターが開設されるなど、市民と行政の協働による地域づくりを進めている龍ヶ崎市は今秋、市民団体運営力の向上を図る連続講座を企画。その開講記念フォーラムが10月20日に開催された。講演に続き、地元4つの市民団体が活動を報告、団地にいる男性たちの地域参加を進めたい、公民館などを活用して子どもの地域留学を実現したい、などの提案があった。この日の結論は、「団体同士の横のつながりを深めたい」。

12月1日でNPO法施行5周年

NPO法施行5周年を迎える12月は各地でイベントが開催される。全国規模では、記念シンポジウム「NPOの過去・現在・未来～NPOの課題を整理し、今後の展望を考える」(主催・NPO/NGOに関する税・法人制度改革連絡会)が1日(月)午後7時から、東京飯田橋の研究社英語センターで。茨城は、7日(日)午前11時から、サンレイク土浦で「茨城NPOフォーラム2003」を開催。今後のNPO活動を展望するチャンスです。是非ご参加を。

「NPO運営アドバイザー」派遣中

NPO法人をつくったが、組織運営や経理のことで相談したい、ホームページやパンフレットを作りたい、などの諸々の悩みに対して、県内の3つの中間支援組織が県の委託を受けて訪問サポートを行っています。9月に始まって以来、約10団体に伺い、事業計画づくり、経理システム導入、就業規則づくり、ホームページ作成などの相談に応じています。法人申請中の団体も対象になりますので、まずは気軽にご連絡ください。

下館地域在宅介護を支える会 小松崎光正 登美子夫妻

地元の下館に戻り、旧友らに推されて下館市議に当選した年に、病が襲う。死の手前まで行った。高校時代はラグビーで鍛え、それまでは健康に何の不安もなかった。働きざかりの年齢だったし、2人の子どもはまだ高校生と中学生。「おれは、まだやれる」。焦燥や怒り、無念さは強かった。

ごす「ほっとひと息サロン」へと、活動が広がる。同市稲荷町の下館市地域交流センターの一角に8月にオープンした「ほっとひと息ステーション」は、「市民が自由に話し合ったり、相談し合える場を」との思いから生まれた。小さな井戸端会議の場は、1ヶ月延べ千人が行き来する、「駅」になった。

介護通じ得た友人たち

光正さんを明るく支えてきた登美子さんは、光正さんがいた病院で、同じ境遇の主婦たちと出会い、希望を語り合い、介護のつらさを励まし合った。

お金よりも「ひと運」を

光正さんは、今も左半身が不自由だ。だが、心は穏やかさを取り戻している。会の活動のほかにも「たろう案山子の会」というボランティア活動を楽しんでいる。「商工まつり」での売り上げ金で、お年寄りや身体の不自由な人が憩うためのベンチを置く。市内のあちこちに「ほっとひと息ベンチ」は、すでに4つ。

退院後にその主婦たちと、「ほっとひと息井戸端会議」と称し、介護に関する情報のやりとりや日々の大変さを打ち明け合う場をつくったのが、同会が生まれたきっかけだ。

「金運よりも、人の運の方がよいに決まっているんだから。お金がほしいと考えるのはよそう」。話がやりくりの台所事情におよぼうとした時、光正さんがつぶやいた言葉は、これまでの、そしてこれからの、夫妻の生き方を表している。二人はいつも、たくさんの人たちに囲まれているのだから。

「だれもが本音を語れる機会が必要なのです。毎月、つらいこと悲しいことを語り合いました。5人の時も、15人に膨れ上がった時もありました。心の内を吐露し合いながら、励まされ、エネルギーをもらっていたのです」と登美子さん。

続けていると、「何が必要か」が次第に浮かび上がってきた。身体が不自由な人たちが安心して街を歩けるようにと作成した「福祉マップ」を皮切りに、市内を巡回し、お年寄りや身体が不自由な人と一緒に時を過

(写真と文 佐竹 明)

下館地域在宅介護を支える会
下館市小川1444の28
☎FAX 0296-28-0136
(ボランティア募集しています)

TOPICS